

書簡型連載 8

ケアマネさんとお坊さん



木村 晃子 様



差出人 竹中 尚文

2018年5月17日

大学の一般教養の授業だったと思います。講義の科目名もその先生の名前も顔も忘れてしまいましたが、中国の歴史について話されていました。中国では王朝が終わって、次の時代になると前の時代の「正史」を編纂するそうです。その前の時代のいろんな記録を集めて「正史」を編纂すると、その資料をすべて廃棄処分するそうです。絶対的な記録を後世に残すのです。それも客観的に正確に残すために、自らの王朝史を残すことをしなかったそうです。客観的といっても、記録をしようとしている前王朝を倒して、自らの王朝を立てたのですから、その客観性は疑問です。とはいえ、記録の正確さやそれなりの客観性を大切にしたのでしょう。

中国の王朝のような中央集権的な国家建設を目指した明治政府は、そうした決定版の記録を残すことにしたようです。最近の日本では政府の中核で記録の廃棄や改ざんを行うようになってきました。「正史」を作らなかった日本の本来の性格かもしれません。正史を作らないというのは、メモ書きや伝聞などいろんな形での歴史伝承があっているのです。政府の記録廃棄や改ざんのニュースに触れて、私たちは語り継ぎの歴史を忘れかけていたように思います。メモ書きや伝聞もいいのですが、何より前の世代の語りを聞くことが減りました。お年寄り

の話を書くことが減りました。個人情報保護ということもあってか、誰からか聞いた体験を別の人に語り継ぐことが難しくなっています。

私はお参り先でお年寄りの話を聞くことが多いです。たぶん木村さんもそうでしょう。6歳の時に広島で原爆に遭って、周囲の人がみんな死んでしまって、自分の被爆の証明が出来ないお婆さんに話を聞いたことがあります。また、第2次大戦の時、上海の日本軍の食糧倉庫の番をしていたお爺さんは、一度も戦闘に遭わず肥って帰ってきたそうです。また、前線で壮絶な銃撃戦の中を無事に帰還したお爺さんの話も聞いたことがあります。あるお婆さんは、空襲の中を母と弟の3人で逃げ惑い、自分は誰かに押されるか投げ込まれるように小さな水路に転がり込んだそうです。爆撃が過ぎて、水路から這い出してみると母親の姿はなく、弟は立木の枝に突き刺さっていたそうです。

私の父親は、第2次世界大戦で16歳の時に志願兵として海軍航空隊に入隊したそうです。もちろん、私の祖父母は反対したそうですが、自分が日本を守るのだという決心で入隊したそうです。後悔をしたのかという私の質問に、「もちろん後悔をした。入隊して直ぐに後悔をした」と答えました。16歳で入隊し、18歳で終戦を迎えました。特攻隊は、避けて通れない話です。

友人の出撃は、ずっと無線のマイクを握りしめたそうです。ふたりでとりとめない話をしながら、「いよいよ到着。これから突撃する」といって、スピーカーからは「ツー」という音だけが続いたそうです。それは、かなりの時間であったようですが、無線のスイッチを切ることが出来なかったそうです。それから、しばらくして基地の食堂に張り出された中に自分の名前があったそうです。深夜に飛行機に搭乗して、夜明け前にエンジンをかけたそうです。夜が明けても出撃命令は出なかったので、父は生き残ったのです。

この話を一気にしたのではなく、父は何回かに分けて話しました。普段はよどみなく話をする父親が、断片的にポツリポツリと話しました。出撃することになっていた夜、父は何を考えたのだろうと尋ねました。父はそれには答えませんで

した。今思うと、答えられなかったのかも知れません。友人の死についても語る言葉を持たなかったような気がします。父はひとつのエピソードを話しました。特攻機が離陸を始めると、基地の上官たちは一目散に建物に逃げ込むのだそうです。離陸を終えた特攻機は基地に戻って上官を狙って機銃掃射をしたそうです。機銃掃射の対象は決して出撃をすることのない人であり、自分を特攻の出撃に選んだ人です。映画などで見る特攻隊の映像にはない話です。

父の人生の時間について終戦を境にすれば、戦前で人生の四分の一、戦後で四分の三の時間を過ごしたことになります。私にこの話をしたのは一度きりでした。三倍の時間をつかっても、父の中では決着のつかないことであったと思います。父は保守的な価値観で人生を過ごしたと思いますが、「天皇陛下」という言葉を使うことは一度もありませんでした。

すべてのことに、見る方向性によって見方は異なります。立場によって、見解は異なります。戦争の体験談もそれぞれの人によって話は異なります。一つの見方に絞り込まない伝承の歴史があります。そしてこの『対人援助学マガジン』もそうです。いろんな人が執筆しています。その方向性はバラバラですが、全員が今の時代を語っています。私の若い頃、あるお寺の前に「バラバラでいっしょ」という言葉が貼ってありました。その言葉にとっても勇気づけられたように思います。

竹中 尚文 様

北海道も、ようやく春を過ぎ、初夏の雰囲気がやってきました。外では、カッコウのなき声がします。カッコウが鳴く頃に田植えをする、と教えられたように、田植えの終盤に差し掛かっている当地です。

前は、仕事を辞めることになり、先行きが見えない中での近況報告でした。4月以降は、穏やかな毎日を送っております。朝、新聞を読む時間もあり、世の中の出来事を眺めながら自分の生活に向き合うことができます。そんな日々の中で、記憶や記録があいまいに、自分の都合の良いように扱われている各種報道を目にします。「そんなバカな。」「そんなの絶対嘘だろう。」と思ってしまうことを見聞きした時に、批判するのは簡単ですが、自分は、それにどのように対応しているのか、と内省してみます。世の中の出来事が、自分には関係ないなどと思うことが一番の無責任なのだと思うようになりました。

竹中さんからのお便りから、幾つか考えてみました。「語り継ぎ」が今回のテーマのような気がしたので、そのことについてまとめてみようと思います。

この3月の終わりまで、ケアマネジャーをしていましたので、当然ながら、たくさんの高齢者に出会いました。この仕事を始めた13年前には、明治生まれの人もありましたし、戦争を体験した女性・男性にも出会いました。その当時のお話を聞く機会がありました。けれども、最近は、戦争体験者も徐々にお亡くなりになり、戦争について実体験を聞く機会が年々減ってきたことを感じます。そのような中、私の担当した利用者さんの中でとても心に残る出会いがありました。

Sさんというその方は、特攻兵として戦い、終戦を迎え、帰還した方でした。私が出会ったのは、その方の人生の最後10年でした。お会いした時には、病気もあって、一人暮らしの生活もままならない状態でした。それでも、出会いから9年は自宅での一人暮らしを続けることができたのです。その暮らしを支えたのは、離れて暮らすお子さん達や、地域の人たち、介護保険サービススタッフな

どたくさんの人たちだったことは言うまでもありません。けれども、私は、Sさんの生活を傍らで拝見していた時に、やはりご自身の強い気持ちがその方を支えていたのだと感じます。

私が訪問すると、「いつも同じ話で悪いね。」と言いながら、出撃した時の話や、目の前で戦友が亡くなった話、特攻兵として出兵したものの、戦後に自宅に戻った時の周辺の様子。ただ一人泣いて帰還を喜んでくれた母親の姿、などなど、ゆっくりと聞かせてくれました。Sさんは、すさまじい体験をされていました。私は、Sさんに「死ぬのは怖くなかったのですか。」と尋ねたことがありました。今考えると、浅はかな愚問だったと思います。Sさんは、「怖いとか、怖くないとかじゃないんだよ。」と言っていました。それ以上のことは言葉を発しませんでした。そして、「戦争の時代というのは、人の考え方を洗脳する。みんなおかしくなるんだよ。」と言っていたこともあります。時折、私が今の時代を嘆くような話題を向けると、「なんだかんだと言っても、戦争がない時代こそ、平和というものだよ。」と教えてくれました。

Sさんの特攻兵としての話を聞きたいという人は幾人かいました。当時、Sさんを担当していた私のところに、その依頼が来たこともありました。Sさんに伝えると、「もうそっとしておいて欲しいから、そういうのは断っておいて。」と言いました。そういうものなのかな、と思っていました。それでも、私が訪問する度に、Sさんの戦争体験は繰り返し語られました。時には、「ちょっと来てくれるかい。」と、予定の訪問日とは違う時に電話が来て、訪問すると、その話が始まることもありました。今思うと、Sさんが戦争体験を話す時、目の前で命を落としていった戦友たちの無念の死を思いながら、生きて帰ってきた自分に命ある限り、生ききることを使命として再確認していたのではないかと思います。年と共に不自由になるその身で、生活を続けることの大変さを背負いつつ、自分を奮い立たせるのが、当時の体験だったのではないかと・・・。

Sさんは、2016年の2月にお亡くなりになりました。Sさんの体験は静か

に消えて行ってしまうのかと思いました。ところが、驚きの展開がありました。この3月、書店の前を通りいかかった時に、平積みされた本の表紙に目が留まりました。「不死身の特攻兵」という題名でした。私は、すぐにSさんのことだと確信しました。手に取って、本を開くと、やはりSさんのお名前がありました。すぐに購入して読みました。そこには、私が何度も聞いた話と、聞いたことのない深い心の動きまでも記されていました。9回出撃し、上官に背き、そして終戦を迎え帰還するまでの詳細がありました。私は、この本を一気に読み、読みながら涙がこみ上げました。そして、こうして、Sさんの体験が世の中に残ったことに安堵しました。

私たちは、生きていく限り、歴史に学んでいかななくてはなりません。時代の中に生まれる価値観は、必ずしも、正しい価値観とは言えません。人間が故の愚かさがあります。その時に、犠牲となってしまふ人たちがいます。理不尽なことを引き受けなければならない人がいます。今を生きる私たちは、過去の過ちを繰り返さないように、歴史から学ぶ必要があります。戦争を二度と繰り返してはいけない、というのは当然のことです。と、同時に、戦争という愚かな事件から学ぶべきその他の事項もあると感じます。権力に支配されないように、一人ひとりの発言、行動が求められている時代だと思います。「私はここ（今の時代）にいますよ。」という主張は必要です。その意味では、数か月前に退職を決意して、今を作り出した私の小さな人生も、誰かの役に立つこと、過ちを繰り返さない世の中にしていくために、考える材料の一つにはなるような気がします。

時代をしっかりと語り継いでいくこと、その記録は、今を生きるものの使命だと思います。どのような経験も、そこには仕組みがあり、仕組みを維持している要素がある。私たち一人一人が時代を担っている責任ある立場であることを自覚したいと思います。

一青窈の曲で「ハナミズキ」という歌があります。歌詞の一節に、「君と好きな人が百年つづきますように」という部分があります。時代のバトンを渡してい

く、若い人たちの人生が続いていくように、時代の証人として、「時を語り継ぐこと」に憶病にならずに、行動していきたいと思います。そのように、思えるようになった今の自分も、ここに記録しておきます。

木村 晃子

*参考：不死身の特攻兵 鴻上尚史 講談社現代新書